

内容

プロローグ：漢籍にのみ実名が記される卑弥呼・「倭の五王」

1. 邪馬壹国の時代と「倭の五王」の時代

【国内抗争の支援を求めた卑弥呼と壹与】

【韓半島侵攻の認可を求めた「倭の五王」】

2. 空白の4世紀と東アジア情勢

【3世紀から4世紀にかけての東アジア情勢】

【韓半島に焦点をあてると】

3. 韓半島の支配を求めて

【百濟近肖古王と同盟を結ぶ】

【4～5世紀の韓半島情勢と「倭の五王」の野望】

4. 倭の五王の実像

【「倭の五王」と周辺国王の対照表】

【百濟三書に登場する「倭の五王」】

①倭王讃

【専横な木満致を召喚】

【百濟直支王（腆支王）、妹を倭国へ】

②倭王珍

③倭王済

【百濟蓋鹵王に女性の貢進を要求】

【閑話休題：倭王武≠雄略天皇】

④倭王興

【百濟崑支君入質＝武寧王誕生譚】

【瀕死状態の百濟を救済した倭王興】

⑤倭王武

【倭国在住の末多王、帰国して即位＝東城王】

【東城王の死と武寧王即位】

【倭王武と任那四郡割讓事件】

エピローグ：「倭の五王」は誰か？

【実在性の確かな倭の五王】

参考文献

プロローグ：漢籍にのみ実名が記される卑弥呼・「倭の五王」

当セミナーでは、昨年は「邪馬壹国」、今回は「倭の五王」が課題となっている。「邪馬壹国」の卑弥呼・壹与と「倭の五王」には共通するところがある。漢籍にのみ記されて、記・紀には実名が記載されていない点である。この点は『隋書』倭国伝の多利思北孤も同様である。この共通点の原因は言うまでもなく記・紀の編纂者が両者の存在を曖昧にしようとしたからにはほかならないが、ここでは共通点を認識するだけにとどめて「倭の五王」に主眼を置いて進めていきたい。

「邪馬壹国」の時代から「倭の五王」の時代までは100年以上の隔たりがある。3世紀後半の壹与の事績とされる「泰始初（266）、遣使重訳入貢」（『晋書』四夷伝・倭人条）から5世紀初めの「義熙九年（413）是歳、高句麗・倭国及び西南夷銅頭大師並びに方物を献ず」（『晋書』安帝本紀）まで中国文献に倭国に関する記載が見られないことから「空白の4世紀」と呼ばれ、この間がブラックボックスのようにとらえている。したがって卑弥呼・壹与の「邪馬壹国」から何がどう変化して「倭の五王」の倭国に至ったのかはっきりしたイメージを描くことが難しい状況である。ここでは主に「空白の4世紀」と言われる時代の推移について俯瞰的に東アジア史をながめながら、韓半島の情勢については『三国史記』や『日本書紀』（日本書紀内に残された百濟三書の逸文などを含む）を横並びに検討していき、倭の五王の実像に少しでも近づくことを目標に論考を進めることにした。

1. 邪馬壹国の時代と「倭の五王」の時代

【国内抗争の支援を求めた卑弥呼と壹与】

『三国志』魏志・東夷伝倭人条（以下、倭人伝）によると、邪馬壹国の卑弥呼は景初二年（238）六月、帯方郡経由で魏の都洛陽に朝貢した。同年十二月明帝は倭の女王に対して詔書を送り、「親魏倭王」の金印紫綬を假綬し、倭国及び卑弥呼個人に対して贈答品を下賜し、魏王朝が卑弥呼を「哀れんでいる」ことを国中に告知するように指示した。正始元年（240）卑弥呼に対して返礼使を送り詔書・印綬を奉じると、卑弥呼は詔恩に答謝するために上表文を送った。さらに同四年（243）遣使朝貢した。倭人伝は下文で女王卑弥呼の倭国が狗奴国の男王卑弥弓呼と対立しており交戦状態であることを記している。以上の内容から卑弥呼は狗奴国との戦闘を有利に展開するために魏に朝貢していることがわかる。卑弥呼の邪馬壹国連合には服属しない国（狗奴国）があり、国内の統一のために魏朝への朝貢をしていたということである。

【韓半島侵攻の認可を求めた「倭の五王」】

卑弥呼・壹与の朝貢からおよそ150年の後に「倭の五王」は東晋や宋への朝貢を再開している（『晋書』、『梁書』、『宋書』）。五王最初の讚の除授内容は不明だが次代の珍は「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍・倭国王」を除正されることを求め安東將軍・倭国王に除せられている。珍は宋朝の影響下において倭国と韓半島南部の軍事的な支配を任せてほしいと願い出ているのである。この除正の申請は

ほぼ同様に五代目の武まで続き、武は「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王」に除せられている。

卑弥呼が国内の安定のための後ろ盾を求めて魏に朝貢したのに対して、「倭の五王」は宋朝から韓半島南部の支配権の承認を得て勢力範囲の拡大を意図していたと考えられる。

2.空白の4世紀と東アジア情勢

【3世紀から4世紀にかけての東アジア情勢】

卑弥呼・壹与の朝貢から倭の五王の朝貢までの東アジア情勢を整理しておきたい。

卑弥呼が魏に遣使していたころの中国本土は魏・呉・蜀の三国分立の状況が続いていた。263年、魏が蜀を滅ぼし、265年には魏王朝内の政変で司馬氏が皇帝位に就き晋王朝が成立、280年晋は呉を滅ぼしようやく中国を統一する。魏から変わった晋が統一を果たすことになるが、晋王朝は長く続かない。王朝内部の反乱＝「八王の乱」が起こり急速に弱体化するのは300年を超えたころからである。晋王朝が弱体化するとそれまで抑えられていた五胡（匈奴、鮮卑、氐、羌・羯）などの周辺民族の動きが活発化する。「五胡十六国」時代（304年の匈奴種である前趙の興起から、439年の北魏による華北統一まで）の始まりである。

【韓半島に焦点をあてると】

韓半島では、晋王朝の衰退に伴い、鮮卑の慕容氏が中国東北部へ進出してくる。このことによって中国本土と朝鮮半島を結ぶ連絡が途切れ、朝鮮半島経営に機能してきた四郡（楽浪・帯方・遼東・玄菟）が崩壊する。韓半島北部には高句麗が勢力を伸ばし、中南部は三韓（馬韓・弁韓・辰韓）に分かれていたが、西方面を百済が統一し、東方面を新羅が統一するのはこの頃である。このように晋王朝の衰退によって中国による韓半島の支配が失われ高句麗、百済、新羅などの勢力が伸長するのであるが、同時にこの混乱に乗じて韓半島の最南部に拠点を持っていた倭国も韓半島に勢力を拡大しはじめる。

（この項目は西嶋定生「四～六世紀の東アジアと日本」を参考に構成した。）

3.韓半島の支配を求めて

【百済近肖古王と同盟を結ぶ】

神功紀四十九年春三月条には、百済と連合して新羅を攻撃したことが記されている。荒田別と鹿我別を将軍にして、久氏等と共に兵力を整えて新羅を攻撃するために海を渡って卓淳国に至った。その時にある人は「兵の数が少ないと新羅を破ることはできない。さらに、沙白と蓋盧に奉上して、兵士の数を増やす要請をしろ。」と言った。そこで、百済の将軍である木羅斤資と沙々奴跪が精兵を率いて、沙白・蓋盧と卓淳で合流、新羅を攻めて撃破し、比自焮・南加羅・喙國・安羅・多羅・卓淳・加羅七国を平定した。次に兵を西に移して、古爰津に至り、南蛮の忱弥多礼（済州島）を占領して、百済に賜与した。

さらに、百済の近肖古王（在位：346-375）及び王子貴須が軍を率いて合流すると、比利・

辟中・布彌支・半古の四つの村が降伏した。両国は喜びを分かち合い、千熊長彦と近肖古王のふたりは百済国の辟支山に登り盟約を結んだ。

〈考察：なぜ倭国は百済と接近できたか〉

4世紀の中ごろ、韓半島では高句麗の南下が新羅と百済にとっての脅威となっており、さらに南部では新羅と百済の相争う状況が続いていた。おそらく百済は新羅との争いにおいても劣勢だったのだろう。あるいは高句麗の圧力が百済方面に強かったため百済は兵力を分散して対応しなければならなかった。百済は南端部の卓淳国を通じて倭国との友好関係を模索した。韓半島進出に意欲があった倭国にとって百済からの申し出は渡りに船だった。百済の近肖古王の時代に、高句麗と新羅への対策として倭国と百済が同盟関係を結んだ様子が描かれている。

【4～5世紀の韓半島情勢と「倭の五王」の野望】

前項で述べたように4世紀中葉の建国当初より新羅及び百済は高句麗との抗争に明け暮れるようになる。新羅、百済は韓半島南部に勢力をもつ倭国から攻撃を受けると南北両方から挟み撃ちになる危険性があるため、両国がそれぞれ倭国との友好関係を模索した様子が日本書紀に記されている。倭国は当初、韓半島の鉄資源の権益確保が目的だったと言われているが、次第に新羅、百済両国との関係から高句麗との戦いを始めるようになり、高句麗好太王碑に記された銘文によると4世紀末頃には高句麗にとって最大の強敵は倭国となったかのようである。

5世紀になると倭国は東晋に遣使朝貢を始める。(413年、『晋書』安帝紀)この朝貢が倭王讚によるものかどうかは定かでないが、讚は421年、425年と続けて宋に朝貢している。讚の弟である珍が朝貢使を出した時には「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍・倭国王」を除正されることを求めている。最後の倭の五王である武も順帝紀によると、「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍。」と、自ら称したが、昇明2年(478年)「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍・倭王」に除せられている。珍以降、管轄下に「百済」を含むことを主張しているが武に至るまで百済を含むことはできなかった。百済も独自で宋に朝貢しており、宋から見て百済を倭国の管轄下に入れる必然性がなかったが、大國の宋から韓半島南部を管轄する認可を受けて百済・新羅を含めた連合軍の「七国諸軍事安東大將軍」として高句麗と韓半島の主導権を巡って総力戦に持ち込もうと意図していたのではないか。倭王武はその拠点をも倭国内に(あるいは倭国領の任那に)置くために「開府儀同三司」を申請しているが却下されている。高句麗は既に「開府儀同三司」を認められていた(463年、『宋書』孝武帝紀)ので、高句麗と同じ立場で韓半島を二分した争いに持ち込むことはついにできなかったということである。

4.倭の五王の実像

【「倭の五王」と周辺国王の対照表】

西暦	記事	倭国王	中国皇帝	百済王	新羅王	高麗王
396 -418	晋安帝時有倭王贊 (梁書・倭国伝)	讚 or 先代	晋・安帝 396-418	阿莘王 392-405	奈勿王 356-402	好太王 391-413
413	高句麗・倭国及西南夷・ 献方物(晋書・安帝紀)			腆支王 405-420	実聖王 402-417	長寿王 413-491
421	高祖永初二年詔曰倭讚万 里修貢…(宋書・倭国伝)	讚	宋・武帝 420-422	久尔辛王 420-427	訥祇王 417-458	
425	讚又遣司馬曹達奉表献方 物(宋書・倭国伝)		宋・文帝 424-453			
438	以倭国王珍為安東將軍 (宋書・文帝紀)	珍		毗有王 427-455		
443	倭国王濟遣使奉献(宋 書・倭国伝)	濟				
451	加使持節都督倭新羅任那 加羅…(宋書・倭国伝) 安東將軍倭王倭濟濟進号 安東大將軍(宋書・文帝)					
?	濟死世子興遣使貢獻(宋 書・倭国伝)	興	宋・孝武帝 453-464	蓋鹵王 455-475	慈悲王 458-479	
462	倭王世子興奕世載忠作藩 外海…(宋書・倭国伝)			文周王 475-477		
477	遣倭国使遣方物(宋書・ 順帝紀)			宋・順帝 476-479		
478	遣使上表曰封国偏遠作藩 …(宋書・倭国伝)	武				
479	(倭王武)号為鎮東大將 軍(南齊書・倭国伝)		齊・高帝 479-	東城王 479-501	炤知王 479-500	
502	高祖即位進武号征東將軍 (梁書・倭国伝)		梁・武帝 502-	武寧王 501-523	智証王 500-514	文咨明 492-519
522	武王。年を建て。善記と いふ。(襲国偽潜考)				法興王 514-540	安臧王 519-531

【百済三書に登場する「倭の五王」】

上記の表は中国の文献（『晋書』、『宋書』、『梁書』）に出てくる「倭の五王」と同時代の中国の皇帝、及び百済・新羅・高麗の王との対照表である。

・百済三書に記された「日本」、「貴国」、「大倭」は「倭」、「倭国」のことである。→書紀編纂者が国名を改ざんした可能性もある。

・「天皇」、「天王」と記されているのは「倭王」、「倭国王」のこと。

・百済三書にはかなりの頻度で百済王の名前が出てくるが、百済王の在位期間は『三国史記』等によってかなり明確になっており、「倭の五王」のおおよその在位期間は漢籍の記述によって判明している。



日本書紀に引用される百済三書の記述から「倭の五王」の事績がいくつか見えてくる。

ここでは日本書紀の記事に出てくる百済王等の記述から倭国の王が「倭の五王」の誰に当たるかを特定する作業をしてみようと思う。

①倭王讚

【専横な木満致を召喚】

応神紀二十五年条に引用される『百済記』には以下のように記されている。

「木満致は、木羅斤資が新羅を討伐した時に、新羅の女性を娶って生んだ子である。父の功績によって、任那専任の役に付き、百済に入国して貴国に往還するようになった。天朝（倭国の朝廷）の制度をとりいれて、百済の国政を行い、権勢をほしいままにしていた。しかし天朝はそのことを聞き及び木満致を召喚した。」（現代文は拙訳、以下同様）

上記の『百済記』の記述に対応した書紀本文には、

「（応神）二十五年、百済の直支王（腆支王のこと）が薨去し、子の久爾辛が王となった。王は年少だったので、木満致が国政を執行した。王の母と相姪したりして、節操のない振る舞いが多かった。（倭国の）天皇はこの事を聞いて木満致を召喚した。」

久爾辛王（在位：420-427）の在位期間の事件であるので、書紀に「天皇」と記されている倭国王は「讚」ということになる。（上記の表参照）

〈考察：久尔辛王と木満致〉

久尔辛王について『三国史記』には、「久尔辛王（=久爾辛王）は腆支王（=直支王）の長男である。腆支王が薨去したので、位に即いた。八年（427）冬十二月、王が薨去した。」（東洋文庫版）とだけ記されている。久爾辛王の7年間の治世については他に情報がない。書紀には木満致が「與王母相姪」と出ているが、『三国史記』腆支王の段には「妃の八須夫人は、子の久尔辛を生んだ。」とあることから、木満致と八須夫人の「相姪」関係が推測できる。倭国王（讚）が木満致を召喚したことなどは『三国史記』には全く記されていない。

【百濟直支王（腆支王）、妹を倭国へ】

応神三十九年春二月条には、「百濟直支王、妹の新齊都媛を倭国へ嫁がせた。新齊都媛は、七人の婦女とともに来朝した。」と記されている。応神二十五年条で死去した「直支王」が再度登場する（おそらく書記の編集上のミス）が、腆支王の在位中（405-420）におこったことなので倭王は「讚」か、その先代ということになる。百濟から女子を送らせるさきがけとなったと考えられ、次項の倭王済の時代になって起こる事件の前段となっている。

②倭王珍

「珍」については、即位年代・遣使年代などを特定できる記事が存在しない。「安東將軍」を受号した438年（文帝紀）と「済」が遣使した443年の間に在位しているので百濟毗有王（在位：427-455）と重なるが、百濟三書に該当する記事は見られない。

③倭王済

【百濟蓋鹵王に女性の貢進を要求】

雄略二年秋七月条に引用される『百濟新撰』には、「己巳年（蓋鹵王の即位は乙未年：455年）、蓋鹵王が即位した。天皇は、阿礼奴跪を遣わして、女郎を送るように求めた。百濟は、慕尼夫人の娘を着飾らすことで、適稽女郎と名づけて、天皇に貢進した。」とある。蓋鹵王が即位した455年は、倭王済が宋の文帝から「使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事を加えて安東將軍」を受号した451年と、倭王興が孝武帝から安東將軍倭国王を受号した462年の間であるが、興は即位後あまり時間を置かず宋に遣使しているだろうから蓋鹵王即位の455年の倭王は済である可能性が高いと考えられる。倭王済は前項で記したように百濟腆支王が妹を倭国に嫁がせた前例があることから、即位したばかりの蓋鹵王に女性を送ることを要求したのであろう。

雄略二年秋七月条本文には、「百濟の池津媛は天皇の下に送られてきたが、石河楯（旧本では石河股合首の祖楯という）と姦通した。天皇は大いに怒って、大伴室屋大連に詔して、来目部に命じて、池津媛と石河楯ふたりの手足を広げ木に括りつけて棧敷の上に置き火をつけて焼き殺した。」という事件が記載されている。この日本側の記事は大伴氏の家伝として伝わったものか。

【閑話休題：倭王武≠雄略天皇】

話は変わるが、雄略天皇紀二年七月条に引用された百濟新撰の記事に蓋鹵王（在位：455-475）の即位記事が出ている。蓋鹵王は倭王済あるいは興と同時代。原資料に年代の記載がない日本書紀は百濟三書を挿入することによって編年の目安にしたと考えられている（井上秀雄『百濟三書の史的価値』）。したがって日本書紀の編纂者は雄略天皇が倭王済あるいは興と同時代であると考えていることになる。宋書によると、倭王武が遣使して上表文を送ったのは順帝（宋最後の皇帝、在位：476-479）の昇明二年（478）なので、雄略の在位が書紀紀年で457-479であることを考えると、倭王武と雄略が同一人物とは全く見なしにないかつたということである。松下見林以降の研究者が「武」を共有していることで同一と見なし、昭和以降の研究者が稲荷山鉄剣銘に「獲加多支鹵大王」とあるのを、「ワ

カタケル大王」と読み、書記の「大泊瀬幼武天皇」の「幼武」と共通していそうだという
ことで、大学の入学試験の問題に平然と出すほどに、雄略天皇と倭王武が同一人物である
ということ、史実として確定させてしまった。学界の定説はともかくとして、雄略紀二
年条の百濟蓋鹵王が女性を送った相手の雄略天皇が倭王武でありえないことは以上の理由
からも確定することができるのである。

④倭王興

【百濟崑支君入質＝武寧王誕生譚】

雄略紀五年秋七月条に引用される『百濟新撰』には「辛丑年（461）、蓋鹵王、弟の崑支君を大倭に派遣して天王に仕えさせ、兄王（？）の好みを継続させた。」と記されている。

雄略紀五年夏四月条からの本文には以下のように崑支君入質の経緯が詳細に記されてい
る。

百濟加須利君（蓋鹵王のこと）が、人づてに池津媛（適稽女郎のこと）が焼き殺された
こと（雄略二年七月条に記された事件）を聞いていたので、周囲に対して「昔倭国に女性
を貢いだことがあるが女性が礼を欠いたためにわが国の面目が失われた。今後女性を貢い
てはならない。」と述べた。そこで弟の軍君（崑支君のこと）に告げて、「あなたが日本（倭
国：筆者注）に行き、天皇に仕えなさい。」と言った。軍君は答えて、「上君の命令に従い
ますが、お願いがあります。あなたの後宮にいる婦人を私に与えてください。」と言った。
加須利君は、すでに妊娠している婦人を軍君に嫁がせて、「この妊娠している女性はすでに
臨月になっている。もし途中で出産した時は婦人と子供を一つの船に乗せてたとえどこか
らでも送り返すように。」と言った。以上のような約束をして軍君を倭国に送った。六月丙
戌朔、妊婦は加須利君が言ったとおりに、筑紫の各羅嶋で出産した。生まれた子を嶋君と
名づけた。軍君は、一つの船で嶋君を帰国させた、嶋君は後の武寧王である。百濟人は、
嶋君が生まれたこの島を主嶋と呼んだ。秋七月、軍君が京に入った時に（軍君には）すで
に五人の子供がいた。

〈考察：「崑支君入質」は倭王興の即位祝か〉

倭の五王の四人目の興は宋の大明六年（462）、孝武帝から「安東將軍倭国王」を受号し
ている。興の即位は462年をそれほど遡らないだろう。

上記の「崑支君入質譚」は辛丑年（461）のことなので、興の即位に合わせて百濟蓋鹵王
が弟の崑支君を入質してきたと考えることができそうだ。書紀本文に蓋鹵王の言葉として
「昔倭国に女性を貢いだことがあるが女性が礼を欠いたためにわが国の面目が失われた。」
とあるが、「昔」を倭王済の時代を指すと解釈すると、ここで『百濟新撰』に記されている
「大倭の天王」は即位した倭王興ということになる。

『三国史記』百濟本紀・蓋鹵王十八年条には蓋鹵王が北魏に上表文を送ったことが記され
ている。上表文は、高句麗の長寿王からの攻撃にさらされて危機的状況となっているので
北魏が高句麗を攻撃してほしいと懇願する内容となっている。蓋鹵王は即位直後から高句
麗対策に頭をなやまし続けることになるが、日本書紀に引用された女子献上譚や弟軍君を

人質に出す説話はわらをもつかむ気持ちで倭国との友好関係を求めたことの表れであろう。

【瀕死状態の百済を救済した倭王興】

雄略紀二十年冬条には『百済記』からの引用で、「蓋鹵王乙卯年（475）冬、高麗の大軍が来て、七日七夜にわたって大城を攻撃し、王城は陥落し、失尉礼を失った、国王及び大后、王子等は皆敵によって殺害された。」と記されている。

雄略紀二十年冬条本文には次のように記されている。

高麗王は大いに軍兵を出陣させて、百済を討伐し滅ぼした。生存した百済人は若干いたが建物の下に雑居して食糧はほとんど尽き絶望感にさいなまれていた。高麗の將軍たちは王に対して、「百済人がこの程度ではくじけないことは私はこれまでも見えています。一度意識を失ってもまた次々に再生してきます。徹底的に攻撃して壊滅させてください。」と請願した。対して王は「それはよくない。百済国は遠い昔から日本国の官家である。百済王が日本国天皇に仕えていることは皆知っていることである。」と言ったので、それ以上の攻撃は行われなかった。

さらに雄略紀二十一年春三月条では、

天皇は、百済が高麗の攻撃で大敗したことを聞き及び、久麻那利（熊川 or 熊津のことか）を新国王の汶洲王（文周王、在位：475-477）に与えて、復興に救いの手を差し伸べた。その時代の人たちは皆「百済国はすでに滅亡し人々は難民集団となっているが、日本の天皇のご恩情で国を再興した。」と口々に言っていた。と記される。

〈考察：高麗の百済侵攻と倭国及び倭の五王〉

ここでとりあげた高麗の百済侵攻と蓋鹵王一家殺害は『三国史記』によると西暦475年の出来事であり、攻撃した高麗王は長寿王である。したがって倭国王は462年に宋の明帝から「安東將軍倭国王」を受号した興であり、興は瀕死状態の百済に救済の手をさしのべた。この事件の後3年以内に興は死去して478年に倭王武が有名な上表文を宋の順帝宛に届けることになる。

⑤倭王武

【倭国在住の末多王、帰国して即位＝東城王】

雄略紀二十三年夏四月条は以下のようになっている。

百済文斤王（三斤王、在位：477-479）が薨じた。天王は、昆支王の五人の子の中で第二子に当たる末多王が幼年期から聡明だったので、勅して内裏に招き入れた。親ら頭面を撫で、戒めの言葉を丁寧に伝えて、百済王にした。新国王に兵器と筑紫国の兵隊五百人を護衛につけて国まで送り東城王（在位：479-501）として即位させた。この年の百済からの朝貢品は例年以上だった。筑紫安致臣・馬飼臣等は船団を率いて高麗を攻撃した。

上記の記載は『百済新撰』を原資料として書きかえているらしく「天皇」とするところを「天王」としており、さらに天王が百済の国王を任命できるような書き方をしている。「筑紫国の兵隊五百人を護衛をつけて」も本来何らかの修正を加えるべきところを直し忘れた

のか、原文では「倭国」となっているところを「筑紫国」と直したのかもしれない。
三斤王が薨去した479年は、武が上表文を出した後になるのでここに出てくる「天王」は倭王武ということになる。

【東城王の死と武寧王即位】

武烈紀四年是歳条に引用される『百濟新撰』には、「末多王は無道で、百姓に対して暴虐な行為をしたので国民は王を排除して武寧王を立てた。諱は斯麻王といい、琨支王子の子で、末多王は異母兄である。琨支は倭国に向かう途中筑紫嶋に滞在している時に斯麻王が生まれ、嶋から送り返された。嶋で生まれたのでこの名前が付いた。今各羅の海中に主嶋があるが、王が産まれた嶋なので百濟人が主嶋と名づけた。」と記されている。

武烈紀四年是歳の本文には「百濟末多王（東城王）は道に背き、百姓に暴虐なふるまいをした。国人は遂に末多王を排除して嶋王を擁立し武寧王とした。」と簡潔に記される。

〈考察：東城王治世時代の百濟〉

『三国史記』によると東城王の在位は479年から501年で20年余りにわたって王位に就いている。その間、新羅との関係は良好だったようだ。協力して高麗と戦ったり、婚姻関係を結んだりしたことが『三国史記』には記されている。高麗の侵入に備えて宮殿を修理し築城を繰り返したことにより民衆への負担は少なくなかったのだろう。499年、干ばつのため多くの民が飢えに苦しんでいる時に臣下や官僚から国の倉を開いて穀物を民に与えるよう求めたが王は許さなかった。これらのことが日本書紀に「百濟末多王（東城王）無道、暴虐百姓」と記された原因となっているのだろう。結局腹心の臣下の反乱によって殺害されることになる。次の武寧王が即位するのは501年である。武寧王の在位は501年から523年で父の東城王同様20年以上の長期政権だが、父とは異なり、「仁愛・慈悲の心が寛く深かったので民心はしたがいついた。」（『三国史記』東洋文庫版より）とあるように国民の支持を得ていたようである。

武寧王即位の時点（501年）での倭国王は、502年に梁の高祖から武が征東將軍を受号している（『梁書』倭伝）ので、倭王武である。

【倭王武と任那四県割讓事件】

継体紀二年冬十月条で武烈天皇の埋葬記事があり、十二月条の「南海中耽羅人、初通百濟国。」が記載されている。十二月条は耽羅人＝濟州島の人が百濟国へはじめて朝貢した記事である。倭国には特別関係なく、百濟本記の記事をそのままとったものだろうと岩波版の補注が記している。『三国史記』百濟本紀・文周王伝に、「二年（476）夏四月、耽羅国（濟州道）が土産物を献上してきたので、王は喜んで、使者に恩率の官位を与えた。」との記述があり、継体紀の文章と似た内容となっている。また七年秋八月条には「百濟太子淳陀、薨。」とあり、淳陀は武寧王の子（続日本紀延暦八年十二月条、桓武天皇の母高野新笠の祖先とされる）なので、この記事は百濟武寧王の時代のこととなる。継体紀二年八月条の耽羅国の百濟への朝貢記事と七年八月条の百濟太子薨去記事の間の六年十二月条に有名な「任那四県割讓事件」が記載されている。記事の内容から百濟本記をもとに脚色されたも

のと思われるが、時系列でみると文周王（在位 475-477）から武寧王（在位 501-523）の時期に起こった事件とすると、倭国王は倭王武であった可能性が高いことになる。宋に上表文を送った倭王武の治世において「任那四県割譲事件」が起こったとすると、上表文から抱いていた知的で勇壮なイメージが少し変わってくるのではないだろうか。

エピローグ：「倭の五王」は誰か？

【実在性の確かな倭の五王】

4世紀の東アジアの情勢を見ながら「倭の五王」の実態に少しでも近づくことを目的に論考を進めてきた。

4世紀半ばに倭国と百済のなれそめとなる千熊長彦と百済近肖古王による辟支山の盟約が結ばれたという伝説的な話が神功紀に記載されている。それ以来、韓半島における高麗・新羅を含めた攻防において倭国は比較的百済よりの立場をとっていた。その流れは5世紀に入り「倭の五王」が登場してからも大きく変わることはなく、倭国は韓半島の勢力争いに加わり続けた。

以上のようなことを見てきたわけだが、その結果、「倭の五王」は誰であるか、という江戸時代以来の懸案に対して答えは見つかっただろうか？たどり着いた答えは「倭の五王」は「倭の五王」であって、それ以外の何者でもないということである。

5世紀を中心に東晋、宋、梁などの中国の諸王朝に遣使・貢献し、韓半島において高麗、新羅、百済としのぎを削っていた倭国、その倭国に君臨した5人の王のことである。さらに付け加えれば、記・紀に登場する同時代の天皇たちとは比較にならないほど実在性が確かな存在であることを特筆しておきたい。

彼らの本拠地がどこにあったか、九州なのか近畿なのか、九州であったならば、博多湾岸なのか筑後川沿いなのか、などについてはここでの検討テーマではなかった。当セミナーでの皆さまの発表を聞きながらじっくり考えたいと思う。

参考文献

プロローグ：概要

『晋書』四夷伝・倭人条

『晋書』安帝本紀

1. 邪馬壹国の時代と「倭の五王」の時代

『三国志』魏志・東夷伝倭人条

『晋書』四夷伝・倭人条

『梁書』諸夷伝・倭条

『宋書』倭国伝

古田武彦著『失われた九州王朝』

2. 空白の4世紀と東アジア情勢

西嶋定生「四～六世紀の東アジアと日本」(『ゼミナール日本古代史下』光文社刊所収)

3. 韓半島の支配を求めて

『日本書紀』神功四十九年春三月条

高句麗好太王碑銘文

『晋書』安帝紀

『宋書』順帝紀

『宋書』孝武帝紀

4. 倭の五王の実像

古田武彦著『多元的古代の成立(下)』

『日本書紀』応神二十五年条

『三国史記』百濟本紀・久尔辛王伝(『三国史記』東洋文庫、井上秀雄注、1980年)

『三国史記』百濟本紀・腆支王伝(前掲書)

『日本書紀』応神三十九年春二月条

『日本書紀』雄略二年秋七月条

井上秀雄「百濟三書の史料的価値」(『ゼミナール日本古代史下』光文社刊所収)

『日本書紀』雄略紀五年秋七月条

『三国史記』百濟本紀・蓋鹵王伝(前掲書)

『日本書紀』雄略二十年冬条

『日本書紀』雄略二十一年春三月条

『日本書紀』雄略二十三年夏四月条

『日本書紀』武烈四年是歳条

『三国史記』百濟本紀・東城王伝(前掲書)

『三国史記』百濟本紀・武寧王伝(前掲書)

『日本書紀』繼体二年冬十月条

『三国史記』百濟本紀・文周王伝(前掲書)

『日本書紀』繼体七年秋八月条

『続日本紀』続日本紀延暦八年十二月条

『日本書紀』繼体六年十二月条